

通常の状態なら、エッチなことをする際は服を脱ぐべきだと思うものだが、友奈も天乃も、見たことあるのも経験したことがあるのも、全て着衣状態で

それで良いのかと少し迷いながらも、天乃はみんなと同じ条件で行おうと、決めて。

「着たまましましょうか。もしあれなら……脱げばいいし」

「私服じゃないのが、なんだかちよつと、あれですね」

下着を身に付けてはいるけれど、あとは患者衣くらいで脱がすも何もないような、なんて思う友奈は天乃をちらりと見てそつと、ベッドの端に手を置く

ゆつくりと沈み込んでいく感触、近づいていく距離。このまま自分から唇を重ねてしまったい衝動が友奈を襲う。

けれど、ベッドの上の手に天乃の手が重ねられて、自分からだけでなく天乃からも距離が詰められ——唇が重なる

まずは一つ、一瞬、始まりを知らせる、微かな触れ合い

アイスを一口食べたときのような、うっすらとした甘さが広がっていく

「っ」

「ん……っ」

数秒の後に、離れて見つめ合う。

赤い瞳と橙の瞳を持つ天乃

赤い瞳を持つ友奈。

輝きを損なった血の赤と、輝きを伴うルビーの瞳。だが、友奈は等しくきれいだと思う

「久遠……先輩」

東郷達がなぜあんなにも積極的に迫るのか、自分が受けに回るのではなく、常に攻め手としていようとするのか。友奈はなんとなく、分かった気がした

愛らしいのだ。とても

教えてあげたくなるのだ。心地よさを

染め上げたいのだ。穢れない純白さを

名前を読んだ唇が疼き、求めて。視線が天乃の麗しい唇へと誘われる

ゆつくりとした動きは、慎重さの表れ。しかし、友奈は早くしてほしいと自分からも少しだけ動く

「んっ」

「んう……んっ」

もう一度唇が重なって、天乃も緊張しているというのが言葉だけでなく友奈に伝わっている

ほんの一瞬のキスではわからない、震え。

傷つけてしまうのではないか、心地よくさせてあげられないのではないか、

そんな悩みゆえの、おぼつかなさ

一人で行う淫らな事、その妄想の中の天乃とは全く違う無垢さを感じ、友奈は天乃の体を押

し倒そうと動いた手を、止める

(駄目……なんだよね……)

空中で止まった手はぐっと拳を作り、そしてベッドへと落ちていく

主導権は握るといふ約束だから

この初々しさを感ぜられること、それは無知ではない東郷や沙織では得られること無いものだから

その貴重な体験を、純粹で無垢に淫らな思い出として記憶する

「んっ」

意識の離れかけていた体への唐突な刺激に思わず声を上げると、触れていた天乃の小さく細い、子供のような手がビクツと震えて離れていく

「っ、ごめんね……変だった？」

「だ、大丈夫ですよ。全然。急だったので、つい」

「そ、そう……駄目だったら、言ってね」

「大丈夫ですよ。久遠先輩は、優しいです」

自分よりもはるかに性体験は上の立場なのに一つ一つが初心で、不意に触れられて驚いただけなのに、自分まで驚いて不安そうにする。

そんな天乃の姿に、友奈は自分の情欲がより強く刺激されていくのを感じた

(なんで……こんなにかわいって思うんだろう。なんでこんなにも……意地悪なことを思うんだろう)

主導権を譲ると言う約束さえなければ、攻め手を譲りつつ、頃合いを見計らって反抗したい。

そんな考えが友奈の頭の中に浮かぶ。善い子の自分と悪い子の自分二人の言い争いが勃発し、激しさを増していくと、体が内側からじわじわと熱を帯び、吸い込む空気は生ぬるく、

吐き出す吐息は艶かしくなって……脈打つ心臓は強く激しく、騒音で。けれども、痛みは伴わない。まるで、触れ合うことで分担しているかのような、不可思議な感覚

「……………」

どうすべきかと思案する、天乃の表情。宙に浮いたままの天乃の手。ここで押し倒したら、強引にキスをしたら。どんなに心が震わされるのだろうか、期待を抱く。妄想なんかでは

決して得られない臨場感、緊張感。現実でのエッチがこれほどまでに刺激的なものなんだと、

友奈は字ぶ

「触るわね」

「自由にしてください、信じてますから」

「う、うん」

初めて自分から攻めていくという慣れない状況。性行為の勉強なんて出来てはいないし、してもいい。思い浮かぶのは実体験。東郷や沙織、夏凜との本番、みんなとのキス。

自分に出来るだろうかという不安を覚えながら、天乃は友奈の患者衣のズボンの上から太腿のあたりを優しく撫でる

風呂上がりの水滴を拭うように、デリケートな柔肌を扱うように押し解すこともみほぐすことも出来ないような弱弱しい力で撫でていく

「っ……」

それでも、自分以外からの誰かに、その意志を持って触れられると言う感覚は刺激を孕み体中の神経を鋭敏にさせる。抱きしめたい、キスしたい、もっと、もっと深く……そんな淫らな欲望が次から次へと姿を現しては、準備中の立札の前に行列を作っていく。絶対に開いてはいけない。友奈はそう思いながらも、天乃のたどたどしさに、自分が我慢できる自信は微塵も得られなかった

(驚く久遠先輩……)

想像する、妄想する。押し倒して強引なキスをされた天乃の姿。いつも自慰をする時に想う天乃とは全く違う姿。けれど、胸は高鳴り下腹部の熱、刺激を求める疼きはより騒々しくなっていく。淫らなことに慣れ、積極的になった天乃も、淫らなことに不慣れで、強引な手段を取られると何も出来なくなってしまう、されるがままの天乃も。どちらも好みなのだと、友奈は考え、そして、思う。結局自分は、天乃であればどんな天乃であろうと好きなのだと、えっちなことをしてみたいのだと。

「っ、んっ……」

「……………」

「ん……」

太腿を撫でていた天乃の右手はゆっくりと上り詰めて友奈の脇腹にたどり着く。布の上からでは肌の実感はわからないけれど、しっかりと絞られた体つきで滑らかな曲線を描いている女の子らしい体形なのだとはつきりする。目を閉じれば、思い浮かぶ友奈の体。どこに触れればどんな反応をするのか、覚えていく友奈の為だけの、エッチな勉強、エッチな教科書。参考資料は実体験だ。ごくりと息を飲む、額に浮かぶ汗が顔の表面を伝い落ちていく。けれど、気にはならなかった。空間的な暑さなど、季節の暑さなど、どうでも良かった。

「んっ！」

「……はぁ」

素肌を撫でているわけではないけれど、揉み解すような手つきで体に触れてあげると、友奈からは可愛らしい声が出てくるのだ。時折きゅっ唇を占めて押し殺したりするけれど。でも、それがまた、呼吸と重なって声を漏らした時の情欲に響く喘ぐような声の魅惑さを増すそんなことは関係ないと友奈のくびれに手を這わせ、ずり上がった患者衣の隙間から覗いた白いトップスの上に手を忍ばせる。柔らかいような、固いような筋肉と脂肪が入り乱れて感じるお腹とその中央、ぼこりと可愛らしく指を誘う小さなくぼみが撫で解す中で脳裏に描かれていく。

「可愛い……」

太腿の時とは変わって少しだけ力を込めて、撫で解す。手の平で押し伸ばすように、指先でさするように、そして、人差し指でお臍のくぼみに潜り込む

「ひうつ」

びくりと、友奈の体が震えた。驚いたのか、くすぐったかったのか……けれど、天乃は手を休めない。右手の人差し指から親指へと臍の探検家を入れ替えて、残り四本の指で友奈の脇腹を掴む。

（華奢……のようでそうじゃない。鍛錬を積んだ体つき……）

天乃の手は決して大きくない。だが、友奈の体も決して大きくはない。元々武術的なものをたしなんでいた友奈の体は、筋肉がつきすぎているということこそなかったが、それなりに引き締められているような感じがあった。だが、それがここ最近で大きく変わってきているより勇者として、一人の武をたしなむ人間としての体が出来つつあった。

（胸の成長……いや、夢がないとは言わないけど）

ちよっぴり失礼なことを考えながら、天乃は親指をメインに友奈の腹部をなぞり、撫で、解していく。固くも感じる腹筋が和らいでいく、ムニユムニユとした、脂肪とは違う感触が手一杯に広がっていく。

「っ、あっ……んうう」

当然ながら背中までは届かない。届く必要はない、むしろ、中腹までしか届かないからこそ、行うのだ。

「んっ、っ……」

「くすぐりたいかも、しれないけど……」

爪が立つか立たないかの微妙な角度で指先を立てさせ、わき腹をくすぐるようにひっかくと、友奈の愛らしい悲鳴が小さく聞こえてくる。目は閉じられていて、唇は固く閉ざされながら震えて、頬は紅潮の一途を辿る。堪えるような素振りが、友奈の愛らしさを上乘せする。そんな姿に、天乃は初めて、笑みを浮かべた。淫らな行為をする上で、自分が主導権を握ると言う立場にあって、縛るようにのしかかっていた緊張が解けていく。

「んっ、くっ」

「……友奈」

「……っ」

腹部を弄りながら堪える唇に唇を重ね合わせる。零れ出そうな吐息を奪い取って、扉をこじ開けて離れると、友奈の赤色の視線を感じた。楽しんできていることに、気づいたのだろうか？ そう思いながら、天乃はほほ笑んで。開いた友奈の唇からあふれ出す温い色気に蓋をする。ぬるぬるとした、友奈の口腔。狭い中で機能を失った二人の舌が絡み合う味のないキス。ただただぬるりとしたざらつきと、粘ついた唾液に塗れていく深みのあるキス

「んっ、っ……あ」

「んう……んちゅ」

僅かな隙間から吐息が逃げ出していく、出るものを追わず、来るものを拒む。息苦しさは体を追い詰めまわりつく情欲への抵抗を削いでいく。下腹部の疼きが強く、自由な手が伸びていく。淫らなことをしたいと、より強く感じたいと、身体が求める場所へ

「っは……だめ」

「っ」

しかし、その手を天乃の手が掴む。伸びた手はまだ下腹部へと至ることを望むけれど、握られて捕らわれて自由を失った手は動かない。刺激を求める下腹部の疼きが、狂ったように酷くなっていく。

(むずむずするのに……触り、たいのに……っ)

一人エッチの時はしたいようにできた、やりたいように気持ちよくなれた。自分の体だから、激しくも優しくも自由で、触るのも自由で。だけれどこれは違うのだ。東郷と天乃と友奈、三人での休む間もないような濃密な交わりとも違う。二人きりの受ける側、まったくの自由も与えられないというもどかしさに、泣きそうになる。これはそう、一人で自由に気持ちよくなっているものではないのだ。そんな肉欲の染みた淫らな女など、自由を剥奪されてしかるべきなのだ。

「っー」

ぐいっと手を引かれ、身体がベッドへと引き倒された友奈はその強引さに驚き目を見開くと、月明りを受けた天乃の怪しげな笑みが見えた。普段の天乃とは違う目つき、肉欲を口にし、その味を知ってしまった獣のような瞳。

「……なんとなく、どうすればいいのか分かってきたわ」

「く、久遠先輩……」

妄想していた姿、自分を慰めるときに思い浮かべていた久遠天乃という淫らな力。自分の体を弄ぶようにして、優しくも焦らす意地悪な触れ合いをする性的な交わり。それが現実のものとなっていく

「ああ……」

やっぱり自分はエッチな子だと、友奈は女へと至る声を漏らす。天乃の普段は見られない姿、強引さ、淫靡な行いに興じる姿が、友奈は嫌に思えなかった。力づくで体を穢されてしまいそうなこの状況下で、ただただ昂ぶり悦楽に流れていくから。

自分の体が火照っているのを感じるから

自分の心が悦んでいるのを感じるから

「んっ」

「んっ……んっ」

唇を重ね、舌を絡めながら、天乃は友奈の手を握るのとは逆の手で腹部を弄る。患者衣はもちろんのこと、薄いトップスも中ほどまではだけて、快活な子らしく健康的な色合いの肌、埋めたくなるお臍の窪み、呼吸に合わせて動くお腹がはつきりと見える。

「……………」

優しく、静かに手を置く。撫でず、這わせず、揉まず。ただ、手と手を合わせるように置く。感じる素肌の感触が、柔らかくフニフニとした頬とはまた違う手触りで、天乃は思わずほほ笑む

「っは……あ……」

「あら……いやらしい声」

天乃の煽るような言葉に反応は出来なかった。視界はぼやけたように揺らいで、熱く火照った体、その奥底に眠る何かがより強い刺激を求めて疼く。見える瞳など要らない。聞こえる声など要らない。キスが途絶え、唇に空気が触れる。質感のある獣の蹂躪はなく、変幻自在で愛想のない空気が喉を通っていく。それが……苦しさを孕む

「あ……うう」

切ない。寂しい、物足りない。キスがしたい。唇が物欲しそうに動く、言葉を紡ぐよりも、息苦しい痺れと甘さが欲しい目頭が熱く、目元に涙が溜まっていく。想いを紡ぐキスではなく、蹂躪のような接吻がしてみたいと、友奈は思う。

「……貴女の体も、学んでいるのね」

「っ」

天乃はそんな友奈の頬に触れ、目元の涙を拭って笑みを浮かべる。天乃の手は温かい。優しい。安心する。囁く声が鼓膜を震わせ心に触れる。想像以上の心地よさだった。淫らなことをしているのと心と体が強く自覚して、羞恥心なんていう余計なものを蹴とばしてしまう。二人きりだから、良いのだと、心と体が自由を求めて理性から切り離されていく。手を握る天乃の手を握り返すと、天乃もまた握り返して、軽いキスをしてくれる。それが、嬉しかった。それが、気持ちよかった。潤み、厚みの少ない唇。けれど質感はしっかりと弾力があって受け止めてくれる。そんな天乃の唇の感触が……忘れられない。

「んっ、っ」

「ん……」

ぬちゅりと、淫靡な音がする。空気に触れた水の小さな弾ける音がする。天乃がただキスをしてきただけなのに、自分から天乃との舌の辛みを求めて伸ばしてしまう。そして、天乃はそれを苦笑しながらも受け入れてくれるのだ。淫らさを抱きしめてくれるのだ。だから、理性が止まるべきだと言うのに、友奈の全ては聞き入れようとはしてくれなかった。久遠天乃への信頼が、愛が、何よりも強くて。

「んくっ……」

「ふ……」

「んう……ん……ごくり」

流れ込んできたどちらのものかもわからない唾液を、友奈は飲み込む。味覚の消えた舌ではただの液体でしかないはずなのに、甘い果汁を飲み下したように幸せな何かを感じた。内臓を通り越して、駄々をこねる下腹部の奥底に届くのを感じた。頬から腹部へと手が戻り、ゆっくりと昇っていくのを感じる。心臓がどきどきと脈打つ。私はここにいるのだと主張する。ここにきてほしいと、胸が躍る。友奈の体はもう、果てに行くまで止まれなくなっていた

「体、熱いわね」

「っ……」

這うように動く手が、胸に触れかけてそのまま脇へと滑り落ちていく。感じていた汗がぬぐい取られていく感覚と、くすぐったさ、そして心地よさ。だが……

(物足りないよ……っ)

「久遠先輩……っ」

「どうしたの？」

「あの……その……」

一言言えば良いだけだ。焦らさないでほしいと、もっと、もっと強く感じたいのだと。けれど、天乃の浮かべる笑みが、動きの止まった手が、友奈から言葉を奪う。言ったら余計にしてくれなくなってしまいそうな、気がして。しかし、そうなってしまいかもしれないと考えようと、下腹部がじわじわと、むずむずとする。下着の中が蒸れているのだと分かる。擦れ合う部分がじゅくりと湿り気を帯びているのだと分かる。それは、一人エッチで天乃を思い、胸に触れ、下腹部を弄っているときにも感じるような感覚で。

「言葉にしてくれないと……解らないわ」

「ひゃう……う」

耳元のささやき、感じた熱のある吐息。思わず甘味のある声を漏らした友奈に、天乃は唇を重ねる。全部わかつているのだ。分かっとうえで、虐めるのだ。主導権を握るのはこういうことなのだ。誰かに導かれて。

(可愛いわ。淫らだわ……友奈らしくもない……えっちで、みじめな……)

「ドキドキしてるのが分かるわ。どんどん強くなっていつてるのも」

「う……」

「ふふっ」

声が近い、触れ合う熱が重なり合っていく。その抑えきれない鼓動に友奈は目を瞑り、固く唇を閉ざしてしまう。そうした方がより攻めて貰えると、身体が勝手に動く

「……友奈」

キスを求めているかのように震える唇、閉じられた瞼、激しく高鳴る心臓の音。一つ一つを天乃は視覚、触覚、聴覚。全てで感じ取ってまだ望みのある。だろっ愛らしい膨らみに触れる。ほんの少し力を入れれば握りつぶせてしまいそうなほど未成熟な乳房、まだ子供らしさを感じる乳頭。それを天乃は丁寧に、少しずつ味わっていく。

「っん……」

ピクリと、友奈の体が動く。自分と同じように胸に触れられるのが気持ちいいのだろうかと考えながらゆっくりと手を動かす。最初は指先だけで形を確かめるように優しく力を抜いて、布に隠された実りの形を頭の中に描いていく。

「んっ、っ……ふ……」

「一人でする時に……触ってる？」

「そ、それは……っ」

「……触ってるのね」

「ひうっ！」

答えなかったのに、指先だけだった感触は手の平も含めた全体へと切り替わり、揉むというよりも握られるような刺激を受けて友奈は声を漏らす。何をされるか分からない。その先の見えないところから飛び出してくる刺激は友奈の体に深く刺さるのだ。そして、それが友奈にはたまらなく心地よく感じられてしまう。穢れがないがゆえに、性交というものに対してまったくの耐性を持ち合わせていなかったがために、愛おしい相手との交わりの全てが心地の良いものであると、身体は学んでいってしまう。そう、たとえそれが、一方的に蹂躪されるようなものであるのだとしても。天乃の指と指間に導かれた先端がゆつくりと絞められていくのを感じる。赤子が口にする為の物。母親になった証の一部が生み出されていく場所。だが今は——友奈にとって快楽を得るためのパーツでしかなくなってしまっていた

「あっ、っん」

「可愛い声ね」

小指と親指で弄ぶように乳房を押し揉みながら、人差し指と中指で隆起していく赤子の為の突起を絞る。ここからいつか、母乳が出ることはあるのだろうか？自分が困っている限り、母親としての役割を持つことはないのではないだろうか？そんなことを思い、頭を振る。そこから出ていくものがないのだとしても、知識を蓄えていく中で、いずれ自分が求めることもあるだろう。女のふくらみが、子の為だけにあると、誰も定めてはいないのだから。

「っ、んっ……あっ……ふ……」

「……こう、かしら」

「っあんっ！」

友奈の体が火照り、艶かしさの入り混じった声が漏れ出して握り合っていた手が自由に出来る事に気づいた天乃は、にやりと笑みを浮かべる。握り合うのも友奈の体の反応がより鮮明に分かって面白い、心が奮い立つ。けれど、友奈が嬌声を抑えきれなくなった今、肌を感じる友奈の情報は重要ではなくなったし、ここからさらに攻め込むには、片手だけでは不十分なのだ、天乃は思っ

「……もう少し、ね」

「はあっはあ……んくっ」

口元からだらしなく涎を溢れさせている友奈が、息を飲む。ごくりとこの度が動いて潤い熱っぽさの増した吐息が漏れ出してくる。少し前まで、淫らなことなど知らなかったとは思えないような艶っぽさだった。そして、ちらりと友奈の下腹部へと目を向けた天乃は、悟られないように友奈の淫らさに包まれた溪谷へと触れ——

「ひゃあうっ!?!」

一際大きく友奈の嬌声が響く。九尾の対策がなければ誰かが駆けこんできそうなほどに、大きな媚声だった。だがそれは、友奈の体がどれほどまでに出来上がっているのかを知るのに十分で。

「もう……声が大きいんだから」

「だ、だって——んっ」

何かを言いかけた友奈の口を口でふさぎ、舌で舌に触れる。舌をつつき、表面を舐めて、動けば翻弄するように逃げて、唇で唇を包む。友奈の小さな呻き声を飲み込みながら、自由な手を友奈の患者衣のズボンの中に手を忍び込ませていく

「んむうっ！」

友奈の驚きが、口の中から伝わってくる。何をするのかと、恐怖にも似た何かを感じるけれど、天乃は蹂躪する。抵抗を許さずに、口の中から解していく。

「んっ、んう、んうあ……」

「んっ、んちゅ……んんっ！」

子供らしくと言うべきか、大人の色香を感じるような作りのない友奈の下着。その上から淫靡の扉のあたりに指を這わせると、湿った布が指先に張り付いて、水をため込んだスポンジを押ししたときのように布から溢れる淫らな水を感じる。喘ぐ声が喉を通っていく、口での呼吸を肩代わりする鼻息が荒々しくなっていく。中指をゆつくりと沈み込ませて、淫欲の入り口を掠めて、その上の小さな穴と、友奈の高ぶりを示す陰核を弾く

「んにゅうっ！」

「んっ、っは……」

一際大きく震えた友奈の体に、天乃は思わず離れて乱れた呼吸のままに、ズボンの中から逃げ出した自分の手の艶を見つめる。陰部からしみ出していく淫らさに溶けた理性の涙。擦り合わせれば微かに糸を引いて途切れる。食物のような美味たる匂いではないはずなのに、なぜだか……嫌いになれない淫惑の香り。そして離れた天乃の口先から伸びる舌。そこから伸びる交わりの糸は友奈の吐息に包まれながら口の闇へと消えていく。

「はあ……はっ……あ……」

目元の雫、紅潮した頬、閉じない唇、あふれ出る熱気。自由なのに動かない両手、上下する胸。天乃はそのすべてを視界に収めて、ほほ笑む

「……貴女の体は、覚えたわ」

「あ……う」

一方的に手を出されることも、自分が一方的に手を出すこともどちらも心が躍る。体が疼く。だから思う、だから気づく。天乃は自分が淫らな子であるのだと錯覚する

穢れは求む。穢れなき少女の柔肌を

穢れは求む。穢れゆく少女の嬌声を

ゆえに浸る。愛欲の狂宴こそが穢れに満ちた闇を停滞させる術だと願ひ

ゆえに吞まれていく。それが己の意思であるのだと【彼女】に誘われていると知らずに。

「ふふっ……夜はまだまだ。長いよ」

「ま、まだ……ある……」

怪しげな色香を感じさせる天乃の言葉を、放心しかけの友奈は繰り返して呟く。

自慰行為は止めるのも自由だ。だが、二人で行うこれはたとえ自分の体が限界に至ってもなお、相手が満足しない限りは続く。その未知の領域が怖くないと言えば嘘になってしまうだろう。だが、友奈はこうも思うのだ。踏み入ってみたいと、感じてみたいと。東郷や沙織達が先へと進んでいく中、自分だけが取り残され、無知で無垢で穢れないままで取り残されてしまう可能性もある中で、今という時間を恐怖ゆえに逃げ出せばそれは可能性ではなく結末になってしまう。そんな気がする。それに、この先はもう、東郷も含めた三人で経験済みだと、友奈は思っている。

「おね……がいます……」

「あら、ここから先はもつと淫らでいやらしいことよ？」

「と、東郷さんだって、した。ことですから……」

「……そうね」

友奈はえっちな子になりたいわけではない。ただ、ついていきたいのだ。置いて行かれたくはないのだ。そしてなにより、学びたいと思っているのだ。その意志の籠った友奈の瞳を、天乃はまっすぐと見返して笑みを浮かべる

「いいわ、教えてあげる」

そう言っただけで笑ってみせた天乃は、もう一度友奈とキスをする。停滞した空気、切り替わりかけた空気。仕切り直しだと言いつつ、軽く唇を重ねるキスをしてから、深く交わるキスをする。どちらかが言い出したわけでも無く、ねっとり、じっとり、舌を絡め合わせていく

「っは……」

「んっ……」

滴るどちらかの唾液も気にすることなく天乃は右手を友奈の下腹部へと伸ばす。今度はズボンの中ではなく、上から内股のあたりを擦るようにしながら、じわじわと距離を詰めて、親指が触れるか否かの距離でまた離れて、また近づく。布の擦れる音がいやに生々しい。近づいたたびにドキドキとして、触れられるのではないかと体がおどおどする。さつき感じさせられた突き抜けるような快楽、それがまた来るのではないかと体が緊張する。

「ねえ、友奈」

「は、はいひゃあっ！」

名前を呼ばれて返事をしようとした瞬間、近づいて離れるだけだった手がすっぽりと股の形に収まって、押し潰され下着に弄ばれた性感帯から伝わる刺激に、友奈は情けない悲鳴を上げる。

「あ、ひ……」

余りのも突然なことに一瞬、息の途絶えた友奈はしびれたように崩れた声を漏らして、ジンジンと快感の滞る股の感覚に意識が導かれていくのを感じて

「く、くおん、せんばい……」

「ごめんなさい、急過ぎたかしら」

困り顔で謝った天乃だが、股に宛がった手は動きこそしないがそのまま、友奈は感覚に警戒して身構えた——けれど

ぐにゆりと下着が割れ目に捻じ込まれ、ズレた下着が陰核を巻き込んで快樂を迸らせていく。その刺激が届くまでは数秒もない。だが、友奈はそれがとてつもなく遅く感じた。ビリビリとした何か良く分からなくて、でも、感じたいと思ってしまうものが体の内側から駆けあがってくるのを感じて

「あ、ああ……ひゃああああっっ！」

大きな悲鳴を上げ、身体をのけぞらせて、今まで蓄えられていた物、堪えていた物がはじけ飛んでいく。理性が流れ落ちて、体中が緊張ではない歓喜の震えに満ちていくのを感じる。

自慰行為でも果てを見ることは出来るけれど、それで見える世界はあまりにも小さいのだと友奈は知らしめられた。井戸の中で一人ぼっちのカエルだったのだと教えられた。

「あっ……う、んっ」

「ズボン、履き替えないと駄目ね」

「あ、や……ま、待ってくだ……」

脱がされるのだと分かって、願おうとした矢先。腰元の紐が完全に緩められ、ずるりと強引にズボンが剥ぎ取られていく。濡れた下着を撫でる空気が、いやに冷たかった。シミの出来た下着を見られるのが、何もかもが溶けてしまいそうなほどに体を火照らせていく。

「や、み、見な——」

「見せて」

「いい、嫌ですっ」

慌てて自分の下腹部を両手で隠した友奈は、天乃の要求にも頑なに拒絶を示す。空気にさらされ、冷静さが微かにも戻ってきたのかもしれない。だが、天乃は下腹部を隠す友奈の手に手を重ねて、力強く押し付けていく

「んっ、っ……」

「もう少し抵抗しないと……友奈。自分の手でまた。気持ちよくなっちゃうわよ」

「っ、あっんっ！」

両手で蓋をしても、天乃の力は強く紙一枚で阻んでいるだけのような、無抵抗でしかないような感覚で友奈の手を友奈自身の陰部に押し付け、擦り込んでいく。意地悪な力に弄ばれていくのだと分かっても、その手で抵抗していても、身体も心も心地よさに飢えているのだと友奈は分かっていた。両足が動かない天乃に対して本気で抵抗すれば形勢逆転も狙えるのに、それをしようと思えないからだ。

「あっ、んっ……はあっ、は……あっ、んっ！」

友奈の体の内側に快樂が満ちていく、淫らな快樂が今か今かと駆け抜ける準備をする。きゅうきゅうと、体の内側、子を宿すべき場所が疼いているのを感じる。ゆつくりと、勝手に足が開く、抵抗するのなら閉じているべきなのに、敗北を認めるように開いて、最後の刺激に身構えて——

「……なんて、ね」

「ふえ……え？」

「そんなに嫌なら止めておくわ」

「そ、え……あ……」

頭が混乱して、言葉が上手く紡げない。視界に入る残念そうな天乃の表情が鮮明になっていくにつれて、体の熱が段々と引いていくのを感じる。しかし、子宮だけは駄々をこねて求める。欲しいと、最後まで続けたいと。はく離していく自分自身の全てに困惑する友奈は天乃が自分の手を拭い「片付けようしよう……」と、さも冷静に淫らな空間から抜けていくのを見て、首を振る

「ま、待ってください」

「？お風呂は、私一人じゃ——」

「意地悪言わないでください……っ」

戦っているわけではないけれど。でも、友奈は負けたのだと感じた。そもそも、主導権を譲るなんて行為自体が愚かだったのだと悟った。最後までして貰えなかった。自分の抵抗ゆえに気をやることを止められてしまった。それゆえの涙を、友奈は零す

「ま、まだ夜は長いって、ついさっき……だ、だからっ」

「でも、嫌なんでしょう？」

「嫌じゃないですっ、気持ちいいのは……でもっ、こんな、おもらししちゃったような下着……っ、見られるなんて、なんだか……ひっく……」

下着はもう、使った後の水着のようになっていて、まだ濡れていない部分との差が明確になってしまっていて、恥ずかしかった。でも、だけれど、友奈は自分の手をどけて、天乃にさらす。みられるのは恥ずかしい。でも、このまま不完全燃焼なのは、苦しくて、辛くて……切なくて。

「……馬鹿ね」

涙を堪えようと瞑った瞳、途切れた視界。その真横から天乃の声が聞こえた。頬に優しさが触れて、辛さを拭う。

「ちよつとだけ、意地悪したかったの」

「え、あ……んっ！」

耳元でのささやきに重なって、下腹部がぐにゅぐにゅと指先で揉み解されていくのを感じて喘ぐ。ぐちゅりぬちゅりといやらしい音がする。下着の隙間からあふれ出す淫猥な匂いが鼻をつく。そして——心地よさが駆けあがってくる。

「あっ、んっんっ……あっ、はあっは……あっ」

乱れた呼吸が整わないまま刺激が迸って美声が零れ落ちる。苦しい、辛い、けれど、気持ちがいい。このまま死ぬるのはさぞかし幸せなのだろうと、錯乱するほどに。

「……んっ」

「ふえ……」

ふと聞こえた自分ではない蕩けた声に、友奈は目を開くと、白魚のような美しい肌を赤く染め上げ、浮かび上がる汗に濡れた美しい少女が、自分の下腹部へと手を伸ばしているのが見えた

「……友奈ばかり、ずるいから」

「そ、それなら……っ」

ここで初めて、ゆうなは天乃の体に性的な意志を持って触れた。患者衣の中に隠れながらも存在感のあった胸に下から支えるように触れて、ぐにゆりと握る。布の上からでも分かる柔らかさ、手の形に歪む乳房を弄ぶ

「ひんっ……っあっ」

「……久遠先輩の、弱いところ」

それはもう知っている。だからこそ、友奈はすでに準備の出来ていた天乃の体に強い刺激を与えられる。患者衣を除け、ブラなくシャツのみの警戒心の欠片もない天乃の乳房の天辺を甘噛みする

「っひっ」

びくりと、天乃の体が震えて、けれど友奈は構わず吸う。手加減の知らない赤子のように強く吸い付き、噛みつく。それだけで天乃の口からは甘い声が零れる。ずっと耳にしていたと思うような、友奈の知る【受け側】の天乃の声

「さっきの——仕返しです」

「やっあああっ！」

天乃の患者衣のズボンの上から、膝を強く押し当てて、力強く擦り上げる。何度も、何度もズリズリと、時には押し付けるようにグリユグリユと。

「あっ、ひやっ……んっ、あっ、ぎ、ごめっ」

「もっどです……っ」

「やっ、ああああっ」

びくりと体が跳ねて、天乃の体がしなだれかかって来ても、友奈は出来る範囲で擦る。そのたびに聞こえる天乃の嬌声が心地よくて、嬉しくて、幸せで。何度も聞いて、叫ばせる。

「はっはあ……あっ……う、やっ、ああっ」

「はっ、はっ……んっっあ、ひあっ！」

しかし、天乃の股に足を押し当てている分、友奈自身も天乃の足が自分の敏感な所に触れていて、同じだけ快感に襲われていた友奈もまた、天乃と同時に果てへと至って力が抜けて抱き合う。下敷きになる友奈の耳元では、天乃の荒くふやけた息使いが、零れていた

「ゆ、友奈の……ば、ばか」

「う」

「主導権は、私が……」

「久遠先輩が気持ちよくなりたいって……言ったんですよ……」

「それは、だけど……」

「えいつ」

「ひやああつ……あつ……」

何かを言おうとした天乃に、どこからともなく沸いた悪戯心で対応した友奈は、膝の当たっている天乃の下腹部が、ズボンを抜けて染み出していることに気づく。それは友奈も一緒に、ベッドに横たわっていた分下着の中であふれていた愛液はお尻の方へと下っっていく、もはやどうにもならない状況で。

「ゆ、ゆうなっ！」

「つい……」

「っ」

天乃の気力のない怒りをすり抜けた友奈は天乃の患者衣を剥ぎ取ると、シャツを脱がすことなく頭からかぶる。じつとりとした汗に肌同士が密着させられて、清潔感のある匂いと、うっすらと感じる汗のおいが入り混じった空間に、友奈は思わず舌を這わせて――

「ひゃんっ！」

「んっつ……あ」

「にやっ、ひやあつ、あ、ゆ、ゆうにやあつ！」

「んにゅ……ちゅっ」

「やっ……ああつ！」

割れた腹筋、その筋を舐めて登り髪が天乃の乳房に触れた瞬間に顔を上げる。額には柔らかな女の感触が乗っかって、視界にはいつもは隠された秘境と化するアンダーバストと呼ばれる部分が見える。天乃のくすぐったいのと心地いいのと、ちよっぴりお怒りの声が入り混じるのを聞きながら、友奈はちろりと、舐める

「やっ、あ……やだ……」

「……んちゅ」

「にやあんっ」

「あむっ」

「んにゅう！」

舐めたりキスしたり、吸い付いたり、味覚がないことをほんの少し悔いながら、弄ぶ。想定外の刺激に弱いのならと、少し身を引いて乳房を下ろし、今度はずり上げることなく胸の下半分にぱくりと食いつく

「ばかあつ！」

一際大きな声が上がって、大きく揺れる。やっぱり弱いのだと再確認して、友奈はわざとさらに潜ってシャツを押し上げると、そのままはぎ取って上半身だけを裸に持っていく

「えへへ」

「えへへ……じゃ、なくて」

顔を真っ赤にした天乃に友奈は絶えずに笑みを浮かべて、乳房を掴む。痛くないようにと、優しく丁寧に、桃を刈り取るような優しい手つきで。

「あむっ」

「んっ」

吸い付く。赤子のように。シャツの隔たりがない素肌への授乳行為は温もりが直接伝わってきて、ドキドキとしているような、震えのようなものも感じられて、友奈は心が落ち着いていくのを感じる。そうっと、乳房に手を添えて歯を立てず唇で乳首に噛みついて舌で舐める

「あっ……うう……」

下からそり上げるように、横からなぎ倒すように。存在感のある突起を飴玉のように舌で転がし、柔らかなゴムの水風船のような弾力を唇に感じる

「んっ、んっ……んくっ」

自分は赤ちゃんではないのに、なぜか浸ってしまう。安心する。落ち着く。天乃が喘いでも、もう止めてと願っても、中々止められなかった。

「っは……は」

「んっ、う……あっあ……」

しばらくして離れると、びくびくとしびれたように脱力した天乃はもはや主導権など放棄していて、友奈はあと片づけをすべきだと思ったが、まだ、あと少しだけと。天乃のズボンが脱がす。病院側というか、大赦が用意したものなのか、下着は味気ない白色のもので、びちゃびちゃにシミを作っていて、蒸れた匂いが漂う

「……自分でやる、ように」

自分の中指の爪が傷つけてしまうようなものではないと確認してから、下着を履かせたまま割れ目をなぞる。

「ひゃあっ!?!」

「もう少し、深く……でも、浅く」

「んっふっ、あ……ああっ、やあっ、あっ、んんっ!」

ほんの少し指のお腹を押し付けながら、くちゆりくちゆりと淫惑する音を立てる割れ目を刺激する。天乃の体はもはや痙攣したままで、友奈は股の付け根、足を出すための穴、ショーツの縁に人差し指と薬指をひっかけて、引き上げる。見る見るうちに陰部を覆う布はその面積を小さく細めて、陰唇に食い込んでいく。何かで得た知識ではなく、純粹な好奇心だった。けれど、それは、とても……魅力的で。

「ゆ、友奈……何して」

「このまま、してみたいなって、思ったんです」

「ひゃあっ!」

ぐいっとショーツを引っ張ると、食い込みはさらに強くなって天乃を刺激し、天乃は耐え切れず悲鳴を上げて。友奈の手から力が抜けると、食い込んだショーツの食い込みこそ薄れたものの、それが逆に巻き込んだ陰核をずるりと削り逃がして――

「やああああ!!」

天乃は激しく、快樂を迸らせた

「……あ」

そこまで行くと、元々体力自体が減少傾向にあった天乃は気を失ってしまっていて。友奈はパクリと、胸に食らいつく。天乃はびくっと震えたものの、目を覚ますようなことはなくて、本当に限界だったのだろうと友奈は感じて。

(ごめんなさい)

心の中で謝罪をしながら、胸を味わって下腹部を弄る。自分で自分の下腹部をいじるというのは、自慰行為と変わらない。けれど天乃が実際にそばにいて、味覚はないけれど、乳房の柔らかさ、乳頭の食感が感じられるだけで、自慰とは比べ物にならない心地よさが、えられて。後片付けをすべき。そう考え、思いながら、友奈は何度も、何度も果てる。天乃の手を使って、天乃の下着を使って、普段は絶対得られない心地よさに飲み込まれていく。

「次は……万全な時に、やりたい……なあ」

三人でやった時はもっと長く、濃密で、だからこそ望みを抱いて友奈は天乃の胸に身を寄せ、目を瞑る。

(片付け……は……)

穏やかな心音、心地のいい柔らかさに乱れ狂った友奈の体は簡単に誘われて眠りにつく。少女たちの肉欲の宴は一旦終わる。染みついたものは、味を知ってしまった以上は、もう。何も知らなかったころには戻れない。ゆえにそれは——穢れだった。

### 結城友奈の章

#### 〜肉欲の宴編（リテイク）〜